

グアダハラハラの鍼灸

高松文三

ダラスからメキシコに引っ越して早5ヶ月になる。6月に20年近く続いたオフィスを閉めた。最後の1年ほどは、1日に30人診る忙しさだった。そのオフィスを閉めるためには相当の決心とそして膨大なエネルギーが要った。

グアダハラにある医科大学に行くためである。数年前から計画していたことではあった。患者さんの中には、真剣に心変わりを勧めてくれる人もいたが、ほとんどの人は新しい門出を祝ってくれた。しかし、今思い出しても一家8人のメキシコへの引っ越しは大変だった。

ところが自分の学校や、子供の学校が始まると自分がいるんな意味で甘かったことに気づいた。このメキシコという国は、アメリカとは最も近くて、そして最も遠い国である。隣接しているにも関わらず、その間には大きな、大きな壁がある。言葉が違うのはもちろんだが、生活習慣を含めた文化もまるで違う。

ここでの生活を始めるにあたっていろいろなこと面で面食らった。ともかく事が進まない。自分や子供たちの学校の手続きも、アメリカなら難なく済むようなことでも、ここでは何倍もの時間やエネルギーが要った。担当が異なるということが違ったりすることは日常茶飯事で、同じ人間が日によって言うことが違ったりすることもある。

とにかく何をするのに時間もかかる。ここに来て一番最初に学んだのは忍耐である。銀行の口座一つ作るのにさえ何時間もかかった。とにかく効率性という物には全く興味がないらしい。あえて無駄の多いことや、時間のかかるやり方をしているようにさえ思える。そんな意味ではメキシコではまだ産業革命は終わっていないとも言える。こういうところはアメリカや日本とは正反対である。初めのうちはイライラのし通しだった。

こんな場所で一家8人の生活を成り立たせながら、医科大学を続けるのは到底無理だと悟るのにそれほど時間は要さなかった。ある程度予期していたことではあるが、医科大学を甘く見ていたところや、自分の能力を過信していたことは否めない。諦めたときには深い、深い挫折感を味わったが、それよりもここで一家8人どうして暮らしてゆくかが実際問題として立ち

だかった。というのは、こちらに来てわかったことだが、ここの方がダラスよりもずっと生活費が高いのである。日常雑貨は言うに及ばず、電化製品などはアメリカの2から3倍の値段である。ここに来る前はメキシコに行ったら、毎日トリテアと豆を食らうつもりでいたが、やはりそういう訳にも行かない。子供たちは皆私立の学校に行っているので学費が驚くほど嵩む。パブリックでもまだまだともな学校があるのはアメリカが国としてよりよく機能している証拠だと思う。

ここで生活費を稼ぐ算段に頭を悩ませていたところ、3男坊が通う幼稚園の園長が面白い話を聞かせてくれた。何でもそう遠くないところに、代替医療を専門にやるクリニックがあって、そこで鍼灸師を探しているかもしれないというのだ。

まあダメ元と思い、早速そこへ行って、院長に自己紹介をした。この院長は英語は話さないのでもホメオパシーをやる医師が通訳をしてくれたのだが、この医師がやけに親切で今でも話がうまく行ったのは彼のおかげだと思っている。

ともかくもその翌日から、いきなり患者さんを診始めることになった。アメリカではあり得ないこの鷹揚さには感動した。それ以来、週に5日そのクリニックに通っている。久しぶりに患者さんを診て、治療師としての自覚を新たにした。失いかけていた自信を取り戻したといってもいい。と同時に治療師として十分な誇りを持ってなかった自分を恥じた。浮気をして初めて古女房の良さに目覚めたといっは語弊があるが、まあそんなところだ。つくづく思ったのは、人間最終的には地位や名誉には関係なく、自分がただ単に自分であることだけに満足出来なければ本当の幸福はないだろうということだ。

生活費を稼ぐと言ったが、まだそこまで行っていない。診る患者さんが少ない訳ではない。初めてまだ3ヶ月にしては結構たくさんの患者さんを見ている。既に週に50人近く診ているのだが、如何せん診察費が安い。ダラスの4分の1である。そのくせ鍼のサブライは逆に4倍近いと来ているから本当におかしな話だ。

ちなみにこれは鍼灸のみならず、メキシコは医療費がなべて安い。まあ、だいたいアメリカの3分の1から4分の1と考えていい。ここでは、昼間は自分のクリニックで働いて、夜は病院でアルバイトをする医師も少なくない。ここで鍼灸師として生活してゆくにはよほどたくさんの患者さんを診ないとやっていけない。果たしてそれだけの需要があるかだが、あると思う。というか、

これから鍼灸は広まるだろうという予感がある。まずこの街には Colegio Superior de Acupuntura という鍼灸学校がある。行って見たが想像以上に大きな学校で学生も50人ばかりいた。奇しくもつい先週のことだが、この学校が主催者の一つで、かなり大規模の鍼灸学会があった。これが7度目の鍼灸学会 (Congreso Nacional de Acupuntura) という。200人ばかり入る会場がほぼ満員だったのには驚かされた。もっと少ないだろうと思っていた。その半分近くは医療関係だったが、それでも関心の高さは伺える。聞くところによると今のところ鍼といえば、肥満治療に限られているように思っている人が多いらしい。確かにダラスで見かけるような巨大肥満は目立たないが、中肥満が多い。

今働かせてもらっている El Centro de Medicina Integradora というところはホメオパシーやら Neural Therapy 等の代替医療を積極的に取り入れている点で、グアダハラでも珍しいクリニックである。ちなみにホメオパシーの医院はあちこちで見かける。このクリニックで働く医師たちは皆親切で、一人一人の患者さんとも十分時間を取って話をしている。この点アメリカの医師は見習うべきだろう。

私はといえば、この小さな一室を当てがわれて治療に励んでいる。患者さんを寝かせるような時間的余裕がないので、置鍼をして、その鍼の真横にお灸をしている。これでほぼ20分くらいの置鍼をした時と同じくらいの効果が出ているような気がする。心もとないが手応えは悪くない。

最近はずいぶん欲が出て来て、自分のクリニックを持ちたいと思い始めている。そしてここで、東洋医学のすばらしさを広めてみたい。その機運は確かにある。というか要するにこの超のんびりムードと、年中快適な気候が気に入っているのかもしれない。

高松文三

1956 生まれ。

1983 年、ニューメキシコ・サンタフェの Kototama Insitute(言霊塾) 卒業。

1988 年よりダラスにて開業。

2005 年、University of Texas at Dallas 卒業。

現在、グアダハラ、メキシコにて今後のことを模索中。